平成28年度　福井県立奥越特別支援学校　学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
安全管理・安全指導	教員一人ひとりの安心安全な学校づくりの意識を高めるため、学校安全計画の目標や内容を周知し実践を図る。	学校安全計画の月目標の掲示や取組事例の紹介などで一人ひとりの意識を高める取組を行ったり、安全防災だよりの発行回数を増やし学校の取組を保護者に知らせたりしたことで、目標指数は3つとも達成できた。今後も、安心安全な学校生活を続けられるよう、保護者とも連携して、有効な取組を継続していかなければならない。	学校安全計画を見直す。まず、毎月の目標が適切だったか検討し、変更や追加をしていく。さらに、安全教育・安全管理などの内容の検討を行う。また、安全防災だよりの内容や学校HP、連絡メールの活用などを検討し、保護者と連携しての安心安全な学校づくりへの取組をすすめる。
教育課程・学習指導	【小学部】 各クラスでの授業実践から、有効な環境づくりの工夫について考え、その話し合いで得られたことを各自の授業実践に活かす。	体育の授業を取り上げ、児童が主体的に取組むための環境づくりの工夫について学部全体で話し合い、計画及び実践を行った。それら実践を通し、教師が場につく指導、児童に分かりやすい教材・教具や配置の工夫・評価の仕方などに関して、ポイントや重要性を学ぶことができた。しかし、他の授業へ活かすという点においては、教師の「十分できた」という回答は60％となっており、今後は、教師一人ひとりの意識を高め、他の教科・領域における実践につなげていくことが課題であるといえる。	体育に関しては、今年度の実践を継続し課題となる点を改善しながら、よりよいものへと積み上げを行っていく。また、体育以外の教科や領域において、今年度の学びを活かした授業づくりを行っていく。その際、クラス単位や小集団での授業などになるので、学部全体で授業を見て話し合いができるように、映像の活用や参観できる体制づくり、計画的な研究会の実施などを工夫していきたい。
	【中学部】 全教員が「授業づくりシート」を作成し、生徒の視点に立って、互いに授業を見合う。生徒が主体的に活動する姿やそのために必要な教師の支援について話し合い、授業改善につなげる。	1学期は、生徒の主体的な活動やその支援について、文献や実践集を読み合う学習会を繰り返して、意見交換をした。2学期からは、各自「授業づくりシート」を1部作成して、シートの検討（Plan）、授業実践（Do）、参観やビデオから気付いたことの話し合い（Check）、授業改善（Action）の取り組みを行った。話し合いから課題を見付け、環境設定や支援のあり方を見直すことができた。有効だった授業改善のポイントを踏まえて、今後も授業改善を重ね、日頃の授業へと生かしていくことが課題である。	今年度初めて取り入れた文献を読んで意見交換をする試みについては、有効だったという意見が多いので、今後も時間がもてるとよい。「授業づくりシート」を作成して授業を見合うことは、生徒の実態や支援について互いに共有したり改善したりすることにつながったので、今後の継続を考えたい。授業研究では、皆が授業を見合えるように映像を活用しながら授業改善を重ねていきたい。
	【高等部】 作業学習などで、一人ひとりの短期目標を達成するための目標を設定し、授業を工夫する。	今年度は特に作業学習の目標設定、学習内容、支援の工夫に取り組み、藤原義博氏を招聘した校内研究では、高等部全体で共通のテーマを設定して研究会を行うことができた。高等部教員の95％以上が「作業学習などの授業で学習内容や支援の手だてを工夫できた」と答え、保護者の満足度指標も同様に高い数値であった。　課題としては、作業学習などの授業でできたことを定着させ、現場実習や卒業後の生活で実践できるようにしていくことが挙げられる。	作業学習やその他の教科等の学習を関連づけ、年間計画の見直しを行う。また、「各教科を合わせた指導」について、高等部教員全員で問題意識を持って、検討していく。 学校で身に付けたことを多様な場面でも実践できるようにするため、引き続き地域販売会や交流学習等での活動を設定する。また、現場実習での目標や活動内容と授業の学習内容を関連させて行う工夫をする。

生徒指導 （人権教育）	学校生活においての体験や各行事の内容の充実を図り、異年齢交流の機会を積極的に作り、気持ちよく挨拶し合えるような環境になるように支援する。	学校行事では、執行部の生徒が中心となり取り組んだ。全校集会は、クラスや学部、部活動に発表の機会を提供し、募集することで、児童生徒が主体的に動く場面がより多く見られた。 また、学期に1回「挨拶運動週間」を実施した。執行部生徒が朝、玄関に立ち、元気な声を出して笑顔で対応することができ、異年齢交流を広げることができた。今後も習慣となるように継続していきたい。	全校集会の企画・運営の方法は、今年度の取組を継続し、内容が充実するように啓発する。 挨拶運動をきっかけとして、さらに学校生活を気持ちよく過ごせる環境づくりを支援したり、基本的生活習慣が身に付くように指導する。
進路指導	個々の生徒の課題に応じて授業を工夫するために、就労体験学習・作業学習の様子や実習評価表を参考にする。	就労体験学習（高等部の現場実習、中学部の職場見学・体験）の巡回・引率で聞いた実習先の方々の評価や実習で明らかになった生徒の課題をもとに、これからの授業をどう改善するかの話し合いが各所でされていた。また、生徒全員の現場実習評価表を学部の全教員に回覧することで、個々の生徒の課題を教員が共有し、授業づくりに取り組んだ。 個々の生徒の卒業後の社会参加を見据えた授業づくりを継続することと、この取組を保護者にどう伝えていくかが今後の課題である。	就労体験学習（高等部の現場実習、中学部の職場見学・体験）の巡回・引率に際し、教員が生徒の課題や長所を的確に把握するために、巡回の評価シートを使い評価の観点を再確認する。また、勤労体験学習後の実習先での聞き取りを吟味することで、社会で求められる力がつくような授業にしていく。 また、保護者会で、就労体験学習で発見・再確認された課題とそれに対する授業などでの取組をしっかりと伝えるようにしていく。
組織運営 （多忙化解消）	会議時間縮小のために、事前の資料提示や提案の仕方の工夫などに取り組む。	教員の85％が会議時間を縮小するために取り組んでいると答えているが、会議時間は長いと感じる教員が多く、取組の満足度は乏しい。また、「会議の回数が多い」、「行事前の会議がつらい」との指摘もある。会議の在り方や時期について課題があると思われる。	月別行事計画を検討する運営委員会で、会議の精選が図られないか、行事等の準備を行う時期になっていないか、確認を行っていく。また教職員グループウエアを活用して、さらに会議縮小を図ることにも取りくみたい。
いじめへの対応	いじめの早期発見に努め、発生した場合は早期解決に向けて取り組む。	回答した児童生徒の全員が学校生活で「できた」という満足感を味わうことができたと回答し、学校生活を楽しいと答えている。少数であるが、友達と仲良くできない、いじめを受けた場合に先生に伝えられないと回答する児童生徒もいる。一人ひとりの特性に応じて丁寧に様子を見ていく必要がある。	毎月実施しているいじめの調査の他、担任が中心となり、学校全体で児童生徒の様子を丁寧に見ていく。友達が「嫌な思いをするような言葉」を言わないよう、相手の気持ちを理解できるように日ごろから指導を行っていく。機会を捉えると同時に計画的に学級指導の時間等で指導を行う。